

令和3年度 第1回先進的介護「北九州モデル」推進に関する評価委員会
会議録

1 開催日時

令和3年10月8日（金） 14:00～16:00

2 開催場所

北九州市総合保健福祉センター1階及び5階

(1) 視察：北九州市介護ロボット等導入支援・普及促進センター

(2) 会議：精神保健福祉センター セミナー室1

3 出席者（五十音順）

木戸委員 工藤委員 黒木委員 田代委員 橋元委員 矢野委員
角屋委員

4 会議経過

【議題1 令和2年度の取組状況について】

委員

先進的介護のシステムを普及することで、立場によってどういうメリットがあるのか。評価尺度について、利用者・経営者・介護職員それぞれの立場で見て、細かく分類整理することが大事である。

事務局

一番重きを置いてやってきたのは、介護職員の負担軽減。利用者に対しては、同じ質が担保できるという結果。

委員

少ない人員体制で介護が可能となっても、災害等が起きたときの対応が危惧される。

事務局

確かにその課題は残っていると思っている。それをどう解決していくか、令和3年度以降、新たな実証を進めている。

委員

経営面で見ると、機械を入れて人が減ると報酬も減る。しかし、重要なのは、機械を入れたことによる介護職員や利用者への影響である。総じて、入れないより入れた方がいいとわかっているが、経費の問題で厳しい。

委員

評価基準については、介護というものをどうとらえるかが大切。取組が一般家庭まで広げられると良い。

委員

長期的には、IT やロボットその他の先進的介護システムをどう展開するかといったことを視野に入れて事業評価するとすれば、先進的介護システムのサービスを受けることについて利用者

がどの程度、協力的かということも評価ポイントになる。それは、先進的介護システムの導入による介護職員の仕事の変化や、介護職員と利用者との関係性の変化といったことにつながる可能性を持っている。

委員

施設の種類によってニーズが異なるので、そういったことを調査しながら、それぞれに合ったニーズに対して普及されているかという視点が必要。

委員

この取組で、介護の手間だけでなく、利用者の要介護度が軽減されるかどうか評価する視点も必要。

委員

単に手間が省けたというだけではなく、利用者との関係性や介護の質なども見ていきたい。

事務局

直接人と接しない部分に機械を入れて時間を作り、生み出された時間を利用者とのコミュニケーションの時間に充てるなど、時間をどう使うかは自由に施設の方で考えてほしいと思っている。

委員

機械を入れることで介護現場がどう変わったかという視点を入れると、この事業の社会的な意味があるし、介護とは何かという定義が現在とはもっと違うものとなる可能性があると思っている。

【議題2 令和3年度取組について】

委員

介護の科学化のために、取組のプロセスで介護業務を仕分けし、標準化していく作業が必要で、それがこの取組を評価する視点となる。

委員

この取組を普及するためには、関係団体と市の協力・連携が必要であり、各法人の発展のためにも協力していきたい。

委員

毎朝の健康チェックなど、介護職員がゲートキーパーの役割を果たしている。そこに科学的なものが入ることにとっても興味があり、ぜひ進めてもらいたい。

委員

金額の問題も解決され、必要な人のところに必要な機械が、広く行き渡ればと思う。

委員

当事者の幸せが最も重要。最終的には家庭まで広がるといい。ICT のことなど、この難しい制度を一般市民に納得していただくということを考えて評価すべき。

委員

教育機関の立場からすると、介護士の社会的な地位の向上などの問題がある。機械化の行きつく先について、介護士の業務の新しい専門性などが改めて浮き彫りになるかもしれない、楽しみである。